

平成 27 年度第 2 回 京都市環境審議会

日 時 平成 27 年 12 月 3 日(木) 午後 1 時 30 分～3 時 30 分

場 所 ホテル本能寺 醍醐ホール

出席者 内藤会長, 板倉委員, 小幡委員, 笠原委員, 才寺委員, 坂野上委員, 塩路委員, 島田委員, 住岡委員, 中島委員, 仁連委員, 濱崎委員, 久山委員, 松本委員, 水腰委員, 村井委員, 村瀬委員, 森本委員, 山口委員, 山舗委員, 湯本委員

欠席者 浅岡委員, 大久保委員, 大里委員, 尾崎委員, 木崎委員, 小杉委員, 小山委員, 在間委員, 深尾委員, 牧野委員, 三浦委員, 諸富委員

1 開会

挨拶 環境政策局長

2 議題

(1) 環境基本計画の改定状況及び答申案について

- ・ 環境基本計画改定検討部会（小幡部会長）から、資料 1-1, 資料 1-2 及び資料 1-3 に基づき説明

(内藤会長) この議論が今日の一番大きなところである。指標について特に力を入れて考えてもらっているが、難しいテーマである。部会長から補足することがあれば説明願いたい。

(小幡委員) 2 番目の長期的目標に関して、生物多様性を表す指標の設定が難しかった。それ以外は、今の計画の指標をコンパクトに絞ったという感じである。

(内藤会長) 検討部会メンバーの方から意見があれば。

(板倉委員) 例えば、自然環境の指標は、行政機関が持っているデータを継続的に確認したり、年度間で比較したりすることが難しかったりする。緑被率は定義が変わることもある。京エコロジーセンターの利用者数も予算措置による変動がある。

(仁連委員) 長期的目標 1 の「省エネ活動や再生可能エネルギーを利用する人が増えている」という主観的指標について、増えているかどうかという程度では、今の気候変動に立ち向かえるような施策にはならない。飛躍的な目標がこの分野では期待されているので、指標の表現を変えられないか。

長期的目標 4「環境保全を総合的に推進するためのひと・しくみづくり」の客観的指標について、市民の意識や取組の指標は挙がっているが、事業者の取組が挙げられていない。KES に取り組んでいる事業者数は、事業者の取組を示す客観的指標になるのではないか。

「しくみづくり」については、もう少し具体的に、どういう方向で作っていくのかの記載が必要である。事業者と市民が協力する仕組みづくりはなかなか進んでいないので、どうすれば進むかまで踏み込んで欲しい。

(小幡委員) 省エネなどに取り組む人が増えているというだけでは不十分かもしれない。

KES 事業者数を指標とすることも含め、検討していきたい。

(内藤会長) 私も指標を研究してきた。そもそも主観・客観指標という仕組み自体についての意見もあるが、まずは答申案の内容を前提として意見をいただく。

(森本委員) 生物多様性の評価は難しいものではあるが、世界的には都市の生物多様性の研究と実践が進んでいる。COP10 でシンガポールが提案した都市の生物多様性指標について、それを日本に応用できる、簡便なものを考えようということで、昨年、試行版が発表されている。このように、一定の検討や議論をされているので、京都市環境基本計画でも客観指標として検討していただけないか。

(内藤会長) これは事務局と部会長と私で検討したい。

(森本委員) また、「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト取組団体数」も重要な指標であるが、長期的目標 4 の「しくみづくり」の方に合致するのではないか。

先ほど御意見があった KES の事業所についてであるが、重要な指標になると思うので、ぜひ前向きに検討していただきたい。

(濱崎委員) 長期的目標 2 「自然環境と調和した快適で安全・安心なまち」は、歴史・文化を重んじられている。基本施策で「文化や自然環境と調和した京都人らしい快適生活の確保」を掲げるということであれば、そのことに対する実感を主観的指標として取り入れられるのが良いと思った。

また、客観的指標には「京の文化協働再生プロジェクト」を設定されているが、主観的指標でも、歴史・文化に関する内容を掲げた方が良いと思う。自然環境を支え、気づき、発見する場として、文化や歴史は重要な役割を果たす。特に主観的指標には馴染みやすい内容だと思う。

(内藤会長) 主観的指標を持ち込むということの必要性というのは、客観的指標では捉えにくいものがあるからである。大気や水の状況は、大気・水質調査などで客観的な数値が把握できるものであるが、一方で、客観的な数字で示しにくい。人々の総合的な感性でしか判断できないものもあり、そういったものを主観指標として取り入れていく努力が必要かと思う。

(小幡委員) 「文化」が抜けているのは確かである。一方で、本計画は環境分野に特化したものなので、環境分野に重きが置かれているということを御理解いただきたい。

(濱崎委員) 補足させていただくが、文化の重要性を前面に押し出したいのではなく、文化が気づきのきっかけになるのではないかと、ということである。

(笠原委員) これから 10 年間の環境基本計画である。時代の変化として、高齢化社会の進行はとても早い。高齢化社会の視点は、この計画の中に入れる必要はないか。

- 実際に、計画のどの部分に入れるのか、ということについての案はないが、高齢化社会になると、人づくりについても考え方が変わってくるのではないかと。
- (小幡委員) 長期的目標4の中で「ライフステージに応じて」という表現があるので、このあたりに記述することは考えられるが、皆さんのお考えはいかがだろうか。
- (内藤会長) よく、基本理念のところ、今後10年は時代の劇的な変化が予想されて、その中には人口減少や格差社会、高齢化などがある、といったような記述を入れているプランを目にする。
- (塩路委員) 高齢化というのは、ここでは安全・安心に含まれるのではないかと思った。また、健康・福祉なども別分野ではあるが、本計画は縦割りになっていて横断的な部分が小さい。もう少し他の分野も含めた包含的な計画の方がよいのではないかと。高齢化社会も「ひと・しくみづくり」のところ、少し触れた方がよいように思う。
- (内藤会長) 高齢化になったらエネルギーがもっと必要になるということもあるだろう。「文化」について、物質社会から質の高い文化的な精神の世界に移行するという考え方なら、環境問題にもものすごく関係する。こういう考え方に人類全体が変わらない限り、人類の持続はないと思っている。京都からそのような概念を発信することができれば面白いが、そこまでは難しいかと思う。
- (塩路委員) 全体的に見たら、とても分かりやすくできていると思う。ディテールについては、個別計画のところ、論じられるということで良い。
- 主観的指標は面白いと思ったが、ここで「感じているか」というのは、誰に聞くのか。市民のみか。その点が分かりにくい。京都の場合、観光客等、市民以外の人の寄与というのが大きいのではないかと思う。市民だけであれば、市民以外の人たちの視点が欠けている気がする。
- (内藤会長) 「保たれているか」という表現だと、ずっと見ている市民でないと分からないような表現である。
- (塩路委員) 「感じているか」というのが、誰というのはなく突然出てくる。主観というのは、何かと比べて答えられるものだと思う。もう少し明確にした方がよい。
- (濱崎委員) アンケートの取り方にもよるのではないかと。
- (塩路委員) 住民だけでなく、特に京都は外部から来た人の視点も重要だろう。
- (濱崎委員) 3ページに市民に意見を取ると書いてある。市民以外はどうするか。
- (内藤会長) 市民以外から意見を取るという提案もあり得る。
- (濱崎委員) 外部の人でも、市民でも、どういう風にアンケートを取るのが重要だろう。
- (山舗委員) 誰に聞くかというのは、非常に大事だと思う。誰に聞いたのか分からないと感じるアンケートもよくある。主観的指標というのは、サンプルの取り方が非常に難しく感じる。感度の高い人だけに偏らず、市民全体の意見が分かるようにすることが大事である。

(三宅環境企画部長) アンケートの取り方で想定しているのが、京都市で導入している政策評価と同じく、客観指標と主観指標のそれぞれを評価して、総合的に評価するという仕組みである。

主観評価だが、住民基本台帳から無作為抽出で、3,000人を選んで回答してもらう方法である。ただし、この方法の場合、定住外国人も調査の対象に含まれているが、観光客は対象に含まれていない。一方、産業観光局で、京都を訪れている観光客を対象にしたアンケートもあるので、それもうまく活用しながら、京都を訪ねてくる人の視点についても検討を行っていきたいと考えている。

(内藤会長) 非常に良い指摘である。事務局にもこの指摘を受けとめる仕組みがないわけではないということである。仕組みにうまく合致すれば良いかと思う。

(島田委員) 指標について、数値だけではなくて実感で捉える、というのは重要だと思う。また、実際の客観的数値と実感のデータに乖離があった場合に、そのことが分かることも大事なことだと思う。そのためには、主観的指標と客観的指標を対比できるようにすることが必要で、長期的目標2については、主観的指標や客観的指標のいずれの指標にも大気と水に関することを設定し、長期的目標3についても、いずれの指標にも分別・リサイクルを入れて、対比できるようにした方が良いと思う。

実感と数値の対比をできるようにして、今後の施策に役立てたら良いと思う。

(内藤会長) 主観的指標を新たに設定する意図として、主観的指標と客観的指標を対比して分析するというのと、客観的指標で捉えられないものを主観的指標で捉えるということの2つの目的ということになるだろう。

今後、答申まで手を加えるのは、部会長と私と事務局でさせていただく。指標に深入りした感はあるが、全体的に良い議論になったと思う。

(湯本委員) 分かりやすく親しみやすい当初の目標に沿った計画になっていると思う。指標については、特に生物多様性などについては考えてもデータが追い付かないということも多い。森本委員がおっしゃったように、都市の生物多様性については専門的に取り組まれているので、それを参考にいただければ客観的なデータを集めることはできるだろう。主観的指標は難しい部分はあるかもしれないが、全体的にはよいものになっていると思う。

(内藤委員) それでは、これで議論は終了としたい。12月16日に市長に答申するという日取りは既に決まっている。最終調整は私と部会長と事務局に一任していただきたい。

(2) 生物多様性保全検討部会での審議内容について

- ・生物多様性保全検討部会（湯本部会長）から、資料2及び別紙1に基づき説明
- ・引き続き、事務局（清水環境企画部担当部長）から、別紙2に基づき説明

(内藤会長) 生物多様性は話が広がると面白いが、何か意見はあるか。

(久山委員) 今回、この検討部会のメンバーとなったが、かなりしっかりとした活動ができてきているように思う。事業者の取組や「京・生きものミュージアム」の取組等、良い取組が実施されている。また、生物多様性という言葉が子どもたちに広がるよう、様々な活動が実施されている一方、高校生、大学生や大人に対して、参加するための窓口を紹介していくことも大切ではないか。

その手始めとして、京都市の動植物園、市内にある生物多様性の拠点になる施設で、それぞれが行っている活動を紹介するなどして、保全活動のネットワークづくりを行っていけば、さらに広範囲での取組を進めることも可能ではないかと思った。

(清水環境企画部担当部長) 現在、既に動物園での活動はしているので、更にどういった連携をとれるか検討していきたい。植物園も、来年度から連携事業を予定している。

(内藤会長) 京都市は有名な動植物園があるので、積極的にしてもらいたい。

(松本委員) 外来種の昆虫を飼育して放しておられるという事例があり、それは生態系のかく乱になるのではないかと危惧している。全体の取組としてよいことだが、この点が気になるところである。

(内藤会長) 専門の先生で今の指摘に対応していただける方はいらっしゃるだろうか。

(松本委員) 固有種でなく、亜種を持ってこられてしまうと、他の生き物が圧迫されることもある。具体的には、資料「参考1」16番の「大原の里の田園環境」の「オオムラサキの保護活動が行われている」のところだが、そのエリアの幼虫を調べたところ、すべて関東型だったということである。生物多様性をきちんと理解したうえでの取組が重要である。

(内藤会長) 同じような議論が色々なところでされている。琵琶湖の葦を再生するために植えていたが、遺伝を調べたら、よそのものだということが判明した。見た目には分からないので、遺伝子まで判断するのは素人には難しい。

(清水部長) 貴重な御意見を頂戴した。他にもお気づきの点は御指摘いただきたい。この「生きもの100選」は市民の方々に投票いただき、選定作業を進めているが、おっしゃったようなことについては対応を検討したい。

(湯本委員) 私どももフタバアオイ、フジバカマなどの原産地が分かるようにという指導はしている。現在は「生きもの100選」とする内容をリストアップした段階で、選定するうえでは、そういった点も精査したい。

(板倉委員) オオムラサキもだいぶ吟味した。ゲンジボタルも関東型・関西型で DNA が違うので、それを持ち込まれたら困る。アサギマダラは何千キロも移動する。オオムラサキも、我々の知見では、関東型と外見は同じである。国蝶であるように、もともと日本固有のものでもある。それらをどこまで考慮に入れるのかということも検討が必要だろう。

(松本委員) アサギマダラについては、もともと広く飛ぶものであるので、台湾や北海道など、どこにでもいて基本的に交雑している種類というのは認識している。岐阜蝶とかはそんなに広いエリアではないところで、固有の種類がいるというように聞いている。そのあたりを考慮してほしいと考えている。

(内藤会長) 琵琶湖にトキをなどと言い出したら、専門の先生から外来種を持ち込んではいけないとお叱りを受けたことがあった。しかし、遺伝子を調べたら中国も韓国も日本も全部一緒だったということがあった。その微妙なところを考慮すべきかどうか。

(松本委員) それは専門家の方に評価してもらうところだろう。京都には府立大に遺伝子学会があったと思う。

(内藤委員) 滋賀にも専門家がいる。その人たちが調べてくれたもので、それはよいかという話になっている。最終的には湯本部長にまとめをお願いしたい。

(3) 平成 27 年度 (第 13 回) 京都環境賞に係る受賞者の決定及び表彰について

- ・事務局 (清水環境企画部担当部長) から、資料 3 に基づき説明

(内藤会長) これはこの通り承る。

先ほどの議論に合った高齢化と環境という点だが、私は以前に調査したことがある。そこで、高齢者・子ども・ペットのいる家庭は、統計的に CO₂ 排出量が多いという結果があった。その点も参考に入れていただいて、高齢化が及ぼす温暖化への影響なども考慮してみてはいかがだろうか。

本日の議題については以上で終了する。

3 閉会

挨拶 地球温暖化対策室長